

## 学習者は何を読んでいるのか：大学における「100万語」英語多読教育の実践

良 知 恵 美 子, 柴 田 里 実

What Do Learners Actually Read? :  
One-million Words Extensive Reading in A Japanese University

Emiko RACHI, Satomi SHIBATA

2014年11月21日受理

### 1. はじめに

Extensive Reading (以下、多読) は、学習者の英語読解力を向上させる手段として、国内外の多くの教育者によって導入されてきた。日本国内では、過去10年の間で高等専門学校を中心に飛躍的に広まり、その効果は学習者の英語読解力だけでなく (Kraschen, 2011)、動機づけなどの情意面において、肯定的な影響を与えると報告されている (Yamashita, 2007)。Richards and Schmidt (2002) は、多読を以下のように定義しており、多読は語彙や文法などの知識の蓄積や読書習慣を身につけさせることだけでなく、読書への興味関心を高めることを支援することが目的であると主張している。

“Extensive reading means reading in quantity and in order to gain a general understanding of what is read. It is intended to develop good reading habits, to build up knowledge of vocabulary and structure, and to encourage a liking for reading” (Richards & Schmidt 2002, pp. 193-194)

さらに、日本国内では特に、「100万語多読」(酒井 2002) という言葉が浸透しており、筆者らも各自が担当する英語関連科目の授業内で、「100万語多読」を目指し、英語多読指導を実践してきた。2013年度は、実際に100万語を読了する学習者を、95名中16名輩出できた。100万語を読了するレベルで英語多読を実践している大学は全国的に未だほとんどないため、筆者らの実践を継続し、研究を蓄積していくことは非常に重要であると言える。その一方で、何人の学習者がどれだけ読んだかといった量的な分析に留まるだけでなく、実際に学習者はどの

ような本を読み、どのように「100万語レベルでの多読」を進めてきたのかを調査することは、今後の英語多読指導を改善させる上で非常に重要であると考えた。そこで、本稿では、まず筆者らのこれまでの英語多読実践の経緯を振り返り、次に2013年度の英語多読実践結果を分析し、最後に各レベルの学習者がそれぞれどのような本を好んで読んでいたのかを概観する。

## 2. 英語多読指導実践の経緯（良知恵美子）

常葉大学外国語学部英米語学科における多読指導は、2006年の小規模なゼミからその一步を踏み出した。この数年前から、1年次の基礎英語科目が習熟度別クラス編成で行われるようになった。様々な英語力の学生が入学するようになり、高い英語力を持つ学生だけでなく、補修授業さえ必要となる初級レベルの学生双方にとって、効果的な授業運営を可能にするためである。当時、筆者は、「どのレベルの学生にとっても柔軟に対応できる英語教授法はいったいどのようなものであろうか」という課題に取り組んでいたが、当時酒井邦秀氏が『快読100万語—ペーパーバックへの道』（2002）で提唱する「多読教育」が、高等専門学校をはじめ少しずつ大学教育の現場においても、その効果が注目され始めていた。辞書を引きながら精読をしてきたこれまでの学習方法から一転し、辞書を使わず、つまらなかつたら読むのを止めてもかまわないという多読三原則に惹かれ、早速筆者自ら多読を実践することにした。多読入門書であるOxford Reading TreeやOxford Bookworms、Penguin Readersなどを手始めに読みあさった後、当時Harry Potter Seriesがいよいよ最終結末を迎えようとする時期にあたっていたため、その流れに乗って筆者も長い間手付かずのままにしていたpaperbackを読み始めた。それまで感じたことのない読書速度と滑らかさで、一気に読み終えてしまった。そのときの爽快感は今もはっきりと覚えている。「読むことを純粹に楽しめるこの学習方法なら、多様な英語力に対応できるかもしれない」と直感し、授業に導入する前に小規模なゼミで多読学習を導入することにした。期待通りゼミ学生から確実な手ごたえを感じ、その後授業外多読そして授業内多読へと形態を拡大しつつ、筆者らがそれぞれ担当している英語関連授業を通じ、2014年までに1年生全員に多読を導入するに至り、今年で5年目を迎える。

常葉大学多読教育の特徴は次の2点に集約される。まず、学習者が英語を専攻する外国語学部の学生であるという点である。多読を実践する大学の多くは、理系を含め英語以外の専門領域を専攻する学習者を対象としており、「英語嫌い」や「英語の苦手意識」克服のための打開策として多読学習が行われている。本学学生の英語力は、リメデイアル教育が必要なレベルから、TOEIC、TOEFL、英検等で高得点を取得する学生まで多岐に亘っているが、彼らは例えば「ことば」としての英語の構造や、英語話者がこれまでに創り上げて来た文化等、少なくとも

も何らかの形で「英語」自体に興味を持っている。無関心な学習者を牽引していくことはかなり労力と工夫が必要であるが、「英語の本を読んでみよう」と呼び掛ければ、それを素直に受け入れる下地が本学の学生にはある。第2点目は、本学の多読が、授業内多読活動と外国語学習支援センター（Foreign Language Student Support Center: 以下 FLSSC）を核とした授業外多読活動を加えた形態を採用していることである。FLSSC は常葉大学静岡キャンパス内に設置されており、専任教員と英語力や海外留学経験のある優れた学生から選抜された TA（Teaching Assistant）が、学習者のレベルに配慮した学習・留学支援を行っている。英語力を着実に向上させる学習方法の一つとして多読教育を推奨しており、学生は FLSSC で多読本を借り選書や多読のアドバイスなどを受けることができる。

多読教育の場を充実させるための研究活動にもこれまで積極的に取り組んできた。きめの細かい多読支援体制を維持していくため、指導者が学習者の最も身近な学習者モデルとなり、多様な学習者レベルに対応できる豊富な多読ライブラリーを育てることに力を注いできた。

### 3. 英語多読教育の実践方法

筆者らの英語多読実践方法は以下の通りである。

- ① 各授業で多読方法を説明する。
- ② 毎回の授業内で多読の時間を設けて多読を進める（学習者のレベル、実施回によって時間は異なる）。
- ③ 授業外でも自律的に読むように奨励する。
- ④ 学習者全員に、読書日、書籍タイトル、レベル、総語数、コメントなどを記録させる「英語多読記録ノート」をつけさせる。
- ⑤ 各授業内では、毎週学習者全員の「英語多読記録ノート」を確認し、個別に選書等のアドバイスをする。
- ⑥ 約 3000 冊（2014 年 10 月現在）多読書籍の設置場所である FLSSC で、本の貸借時などに選書等のアドバイスなどの支援をする。

### 4. 2013 年度多読量データ

2010 年度の英語多読導入当初は、年間平均読了語数が 10 万語程度であったのに対し、2013 年度は、年間平均読了語数が 60 万語を超えた。2010 年度は、筆者らが 1 年生の全クラスを担当していたわけではなかったため、全 4 クラスのうち 3 クラスでのみ、英語多読を実践した。多読を実践しなかった 1 クラスの学生からは、「どうして自分たちは多読の授業がないの」等の要望があり、多読に対し肯定的な印象を持っている学習者が多いのではないかと示唆された。2011 年度

からは、英語関連科目（リーディング、文法、ライティング、リスニング）のいずれかのクラスで筆者らが担当することになったため、その結果全クラスで英語多読を実践することができ、学生からの要望に応えることができた。2010年度より、多読環境整備（継続的な新刊図書の配架等）を継続し、年を追うごとに学習者の多読量は増加し、2013年度には100万語読了者を多数輩出することができるようになった。

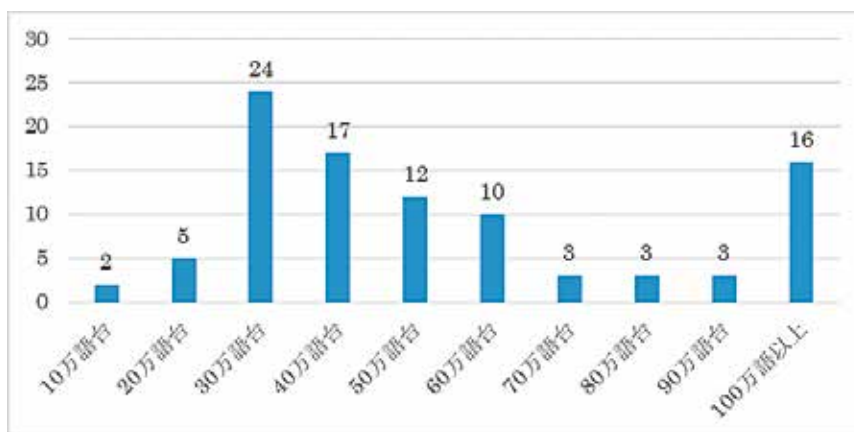
2013年度の英語多読導入クラス（n=105）で、多読記録ノート紛失等の理由で欠損値となった6名を除く95名の基礎データは以下の通りである（表1）。英語多読実施期間は、前期および後期の2学期間である。年間読了語数が最も多かった学習者は300万語以上を読了し、中央値は約50万語であった。

表1 2013年度の英語多読導入クラス基礎データ (n=95)

|        | 読了語数<br>最大値<br>(語) | 読了語数<br>最小値<br>(語) | 読了語数<br>中央値<br>(語) | 100万語<br>読了者数<br>(人) | 90万語<br>読了者数<br>(人) | 80万語<br>読了者数<br>(人) |
|--------|--------------------|--------------------|--------------------|----------------------|---------------------|---------------------|
| 2013年度 | 3,021,875          | 11,1293            | 489,159            | 16                   | 3                   | 3                   |

多読実践者全体の95名中、16名が年間100万語を読了し、3名が90万語、3名が80万語を読了し、半数以上が約50万語以上読了した（グラフ1）。また、最も分布が大きかったのは、年間読了語数が30万語以上40万語未満の学習者群であった。

グラフ1 年間読了語数による人数分布



## 5. 「100万語多読」

「100万語多読」という目標設定は、英語多読の第一人者である酒井邦秀氏が著書『快読100万語！ペーパーバックへの道』（2002）で提唱して以来、日本国内でかなり浸透している。英語圏の母語教育においても、「Million Words Campaign」等の目標を掲げ、米国、英国の多くの小・中学校で読書教育が進められており、100万語という読了語数は、国内外の英語多読教育のひとつの目安となっていると言える。

例えば、米国のミドルスクールの教員である Donalyn Miller 氏は、母語教育の多読を実践しており、著書『The Book Whisperer』（2009）の中で、年間40冊以上の本を読むように指導している。Miller 氏の実践は、自身が実際に読んだ本で教室にライブラリーを設置していることが特徴である。著書『The Book Whisperer』（2009）の巻末には、推薦図書リストが掲載されている。図書の対象は、米国テキサス州の教育システムで Grade5-8 と設定されているので、日本の教育に当てはめると小学校5年生から中学校2年生ぐらいが対象となる。推薦図書リストは、Miller 氏自身が実際に読んで推薦しているというだけでなく、実際に彼女のクラスで多読を実践した子どもたちが推薦した図書であると言う点が非常に興味深い。推薦図書の各本の語数を3万語～10万語と考えると、40冊分は120万語～400万語に相当する。その結果、「（彼女の担当クラスの）生徒は、米国テキサス州の初等・中等教育向けの標準テスト（TAKS：Texas Assessment of Knowledge and Skills）で常に高得点を取得し、ひとりの脱落者もない」（Miller, 2009）と報告されている。従って、「100万語」以上を一つの目安に、多くの本を読むことは、言語力向上を目指す母語教育で、極めて重要視されていることが示唆される。Miller 氏の実践は、母語教育だけでなく、第二言語として英語を学ぶヒスパニック系の生徒への英語教育でも顕著な結果を示しており、日本のような外国語教育においても大いに参考になる。

しかし、日本国内の多読実践において「年間読了語数100万語」という目標に到達することは容易ではない。高瀬（2007）は、「平均的な高校生・大学生の場合、1年間で100万語を読破するのは難しく、50万語達成する学生も数えるぐらいであり、1年間のクラス平均が15～20万語である」と指摘している。これまで、多くの英語多読に関する英語研究で学習者の読了語数が報告されているが、大学での英語多読実践において2学期間で、平均100万語読了しているという報告は未だなされていない。したがって、筆者らの実践で、大学での1年間の英語教育で16名が100万語を読了し、半数以上が約50万語以上を読了したということは、非常に大きな意味があると言える。そこで、1年間多読を実践した学習者が実際にどのような本を好んで読んだのか、多読を継続していく上でどのような本が重要な役割を果たすのかを、学習者のレベルを大きく3つ（上級、中級、初級）に

分けて考察する。

## 6. 上級レベル（多読開始時のレベル：英検2級が合格する程度、または TOEIC500 点程度）（柴田里実）

上級レベルの学習者が、実際にどのような本を好んで読んだのか、多読を継続していく上でどのような本が重要な役割を果たすのかを考察するため、グループインタビューと個別インタビューにより情報を収集した。研究協力者は、上級レベルの学習者の中で、英語多読を1年間実施し、100万語を読了した学習者5名である。それぞれのインタビュー時間は、個別インタビューは15分程度、グループインタビューは1時間程度であった。さらに、筆者らのこれまでの英語多読指導実践およびFLSSCの多読書籍の貸借記録等を参考に、上級学習者の英語多読実践の特徴を考察した。その結果、上級学習者は、英語多読本を意識的あるいは無意識的に以下のような分類で認識していることが示唆された。

- 1) 英語多読の習慣を形成する時期に読む本
- 2) 英語多読に疲れたときに読む本
- 3) 本の世界を純粋に楽しむ「page turner」となるような本
- 4) オーディオブックを使用する転機となった本

第一に、上級レベルの学習者は、英語多読開始から2～3か月の間、多読習慣を形成する本として、1000語から2000語程度の学習者向けの英語副読本（以下GR）を多読開始時期に数多く読んでいる。この頃は、多読の効果に対し半信半疑で、FLSSCで先輩学生に、多読の効果はあるのかと確認しながら進めていた。また、多読開始からの2～3か月の間は特に、読了語数に焦点を当てて、読み進めており、例として以下のような本があげられる。

### 【例】

- Penguin Readers シリーズの Starter またはレベル 1
- Oxford Bookworms の Starter レベル
- Macmillan Readers のレベル 1 または 2

また、シリーズ化された英語母語話者向けの児童書が、初期の多読習慣の形成を促進している。特に、同じ登場人物で構成されており、複数冊出版され、6歳から10歳程度の児童向けの2000語から5000語程度の以下のような児童書も多読の習慣づけに重要な役割を果たしている。

### 【例】

- Marjorie Weinman Sharmat 著の Nate the Great シリーズ（2014年11月現在、全26巻）
- Mary Pope Osborne 著の Magic Tree House シリーズ（2014年11月現在、全52巻）

- Louis Sachar 著の Marvin Redpost シリーズ (2014年11月現在、全8巻)

第二に、上級レベルの学習者は、100万語という相当量を読み進める中で、スムーズに年間100万語を読了しているわけではなく、「英語多読に疲れた」と感じる事が度々あることがわかった。彼らは、英語多読に疲れたと感じたときは、100語程度の短い本も多く活用し、多読をうまく継続させている。例えば、大学生の自分の年齢には簡単すぎるような、幼児向けの本などを読む中で、新しい発見があったり、美しい挿絵の絵本に触れたりすることで、うまく多読を継続させている。肩の力を抜いて楽しめるような本もまた、「英語多読に疲れた」と感じるときに好まれる。さらに、ある学習者からは、「イギリス人やアメリカ人は、このような本を読んで育ってきているのかと思うと、近づいていると感じる」と、興味深い発話があった。「英語多読に疲れた」と感じるときに読む本の例として、以下のような本があげられる。

【例】

- Cynthia Rylant 著の絵本
- Tedd Arnold 著の Fly Guy シリーズ
- Penguin Kids のディズニーシリーズ

第三に、上級レベルの学習者は、「本の世界を純粹に楽しむ」経験ができて初めて英語多読とはどういうことなのかを理解したと回想している。読了語数を蓄積するために読もうとするのではなく、ストーリーに引き込まれ、次々にページをめくってしまうような「page turner」に出会う経験をして、本当に英語多読を進めることができている。ただ、上級レベルの学習者は「page turner」に出会うことは、容易なことでは無いと捉えており、読める本に限られていた頃は、ストーリーに引き込まれるような経験をするのはほとんどなかったと回想している。さらに、挿絵等の無い本を読んで場面を想像することが難しく、ある程度の長さの挿絵等の無い本を読むことができてはじめて、「本の世界を純粹に楽しむ」ことができた振り返っている。上級学習者は、多読初期の頃は、5000語～10000語程度の長さの本を、「ある程度長い本」と認識しており、「そのレベルの本が読めるようになるまでは、信じて読むしかない」と初期の多読経験を捉えている。また、「ある学習者は、「レベルも合っていて、自分にとって想像しやすく、ページ数も自分に合っていて、全部の条件が良くて page turner…でない」と本においてかれちゃう」と page turner に関して述べている。

また、上級レベルの学習者は、英語多読を通して、映画を見るようになったり、知識が蓄積され他国の文化や文学に興味を持つようになったりしたとしている。したがって、映画に関連する本や、例えばイギリスに関連する本などが特に英語多読を促進したと考えている。

【例】

- 『Princess Diaries』、『Princess Diaries 2』 Macmillan Readers レベル 3
- 『Princess Diaries 3』、『Princess Diaries 4』 Macmillan Readers レベル 4
- 『Mask of Zolo』 Macmillan Readers レベル 3
- 『Notting Hill』、『Billy Elliot』、『Ring』 Penguin Readers レベル 3
- 『Les Miserable』 Penguin Readers レベル 6
- S. J. Watson 著『Before I go to sleep』
- Jojo Moyes 著『Me before You』

最後に、上級学習者は、オーディオブックを使用することをきっかけに、英語多読をさらに楽しみ、多読をうまく継続させている様子が観察された。FLSSCでは、書籍とそのオーディオブック（CD）をセットにし、レベル、総時間数、語数などを明記してオーディオブック専用の書棚に配架している（写真1）。FLSSCに配架してあるオーディオブック専用の棚（写真2）を眺めながら、「英語多読を開始した当初は、まさか自分がこんなレベルの本を読むようになるとは思わなかった」と振り返り、5万語前後の本を読めるようになることへの憧れと、それができるようになったことでの自信を示唆していた。本だけで読もうとすると、そのページ数に圧倒されてしまい、逆にCDだけで理解しようとする、5時間を超えるようなリスニングには躊躇してしまうこともある。しかし、CDを聞きながら読むことによって、少しレベルの高い本に挑戦する転機となっている。FLSSCに配架してあるオーディオブックは、学習者がCDを聞きながら本を読むことを想定し、すべてUnabridged版を用意している。オーディオブックにはAbridged版とUnabridged版とがあり、前者はある本をすべて朗読すると5時間かかるところを一部割愛し、2時間程度にまとめているものであり、後者は、CDに録音されている朗読と、本に書かれている内容がほぼ一致しているものである。上級レベルの学習者に好まれるオーディオブックとして、以下のような例があげられる。

【例】

- Alice Kuipers 著『Life on the Refrigerator Door』
- Andrew Clements 著『Frindle』、『Lost and Found』、『One Room』、『No talking』など
- Roald Dahl 著『Charlie and the Chocolate Factory』
- E. B. White 著『Charlotte's Web』



- Kate DiCamillo 著『Because of Winn-Dixie』
- J. K. Rowling 著『Harry Potter and the Philosopher's Stone』

オーディオブックセット (写真1)



FLSSC のオーディオブック専用の書棚 (写真2)



上級学習者は、英語多読の習慣を形成する時期、英語多読に疲れたときなど、英語多読の時期に合わせて様々な選書方法を活用している。またオーディオブックなども活用し、レベルをうまくあげながら、ある程度の長さの本が読めるようになることで、本の世界を純粋に楽しむ「page turner」との出会いを通し、英語多読を楽しみながら継続しているのである。

#### 7. 中級レベル (多読開始時のレベル：英検準2級が合格する程度、または TOEIC400 点程度) (良知恵美子)

本稿においては、4つの習熟度別クラスにおける中間の2クラスを中級と位置づけることにする。一クラスは1年次の必修英語基礎科目 Communicative Grammar IA,B クラス内で、もう一クラスは Intensive Reading IA,B クラス内で多読を実践している。前者はあくまで英文法の習得が授業の目的であるため、多読に充てる時間は30分が限度である。しかしながら、英語の基礎学力はある程度定着しているクラスであるため、短時間で読書に集中できる者も多く、少ない時間を有効に活用しつつ多読を行っている。一方、後者の Reading クラス内での多読は、「読みの活動」に全ての時間を充てることができ、授業内多読を30分から45分ほど設けている。個人の多読記録ノートを見ながら指導者から助言することも十分に可能である。

本学における中級レベル2クラスには、多読のスタートとして FLSSC に準備されている「オレンジと緑のカート」の多読本を先ず読了するように指示している。この2種類のカートは初心者向けの多読本をまとめたもので、多読開始4月

当初は上級クラスを除く3クラス全てが同時に「多読初心者」として読み始める図書が重なるため、FLSSCにおいてこれらの本を貸し出しせず2つのカート内にまとめ、4月から5月までは多読の基本図書がFLSSCに行けばいつでも読めるような状態にしている。勿論、授業内にもこのカートを持ち込み授業内多読を行う。カートには、次の様な書籍が積まれている。

- Oxford Reading Tree 0～5レベル
- Oxford Project X Series
- Springboard 1～16レベル
- Building Block Library 1～4レベル
- Longman Literacy Land Story Street ステップ1～6
- Longman Literacy Land Info Trail Beginner～Emergent Stage
- Dolphin Readers 0～4レベル
- Fly Guy

これらの多読入門書をなるべく早く読み終えることが最初の目標である。多読が5月以降も順調に進んでいく学習者の多くは、この初心者用カートを指示通りに読んでいく傾向が顕著である。それほど英語力の高くない学習者でも、本のタイトル以外に文字のない本を手にとると、「今さらこんなやさしい本を読んでなんになるのか」と、学習方法として多読自体に戸惑いと疑問の表情を見せ、指導者の助言を素直に受け入れられず、勝手にYL（読みやすさレベル）の高い本にいきなり手を伸ばそうとする者もいる<sup>[1]</sup>。その様な時には、じっくり多読の方法を繰り返し説き、多読ノートを見ながら特に読書速度WPM(Word Per Minutes)に注目しながら、心地の良いスピードを保ちつつ読書が出来ているのかを確認するようにしており、時折学習者自ら読書速度を量ることも促している。「疲れずに読む」ことが大切であり、『英語多読完全ブックガイド改訂第4版』（2013）では、「読みきることが出来ても、次の本を読む前に休みたくなる場合には、翻訳しながら読んでいる可能性がたかい」（p.19）と述べている。英語を英語のまま吸収していくことが、滑らかに読むには必要不可欠であり、それが多読の真骨頂である。滑らかな読みを多読を通じて学習者に見つけるよう指導していく。

中級レベルの学習者は早い学生で5月初旬、遅くとも5月下旬までにはカートの本が読了できている。その後は各自の読みの能力に従って適切な図書を助言する。学習者向け Graded Readers（以下GR）と、母語話者向け Leveled Readers（以下LR）のどちらにも偏ることなく、様々なタイプの英語に触れられるよう選書に配慮している。まだ多読初心者のためか、学習者は同じ種類の多読本を一度にまとめて借りる傾向があるためである。GRとしては、圧倒的に次の5種類がよく読まれている。

- Penguin Readers レベル0～1(PGR)

- Oxford Bookworms レベル 0～1 (OBW)
- Macmillan Readers レベル 1～2 及び 2<sup>+</sup>
- Foundation Reading Library レベル 1～7
- Building Block Library レベル 4～9

全般的に Penguin Readers を好む者と Oxford Bookworms を好む学生に二分されるのは興味深い。Penguin Readers Easystarts と Oxford Bookworms Starters は両者ともほぼ同じ語彙レベルで書かれているが、Macmillan Readers Starter は総語数が 500～600 語と多少短くなるので、まだ英語を読み続ける集中力に欠ける学生には馴染みやすいと思われる。Foundation Reading Library シリーズや Building Block Library シリーズは、どの学生も手にとって夢中になる本である。新しく日本で出版編纂された学習者向け読み物であり、やさしい英語で書かれているが、高校生が主人公であり若者の日常を描いているため大学生にも馴染みやすい。

学生には、「読みやすい本を読む」ことが多読の基本であるので決して強制はしないが、同じ GR に偏らずに平均的に読むことを助言している。また、fiction よりも nonfiction を好む学生もおり、彼らには OBW の Factfiles シリーズ、あるいは母語話者向けであるが、Scholastic 社から出版されている Rookie シリーズも好評である。Rookie シリーズは多少語彙が難しいものがあるが、地理、科学、健康、文化、伝記など 200 語から 300 語程度で英語を通じて多様な知識に触れられるため、物語に飽きた学生には良く薦め、FLSSC に配架しているシリーズ 100 冊ほどを全て読破する学生もいるほどである。中級レベルの学生には、まず OBW 1 が自分の好みに左右されず疲れずに読めること、そして後期終了までに OBW 3 まで進むことが目標である。

学習者向け GR と平行して LR や母語話者向け児童書は、「なま英語 (authentic materials)」に触れられる絶好の機会を提供してくれる。多読本を通じてどの学習者でも母語話者が提供する生英語を教材として活用することが可能である。学校英文法の域に留まっている限りは、なかなか paperback を読む力を養うことは出来ない。中級レベル学習者に行った調査では、以下の図書がやさしい児童書として人気が高かった。

- Frog and Toad シリーズ (I Can Read Level 2)
- Curious George シリーズ
- Mr. Putter and Tabby シリーズ

これらは YL 1.2～1.5 が中心であり、あまり時間をかけずに読み終わることが出来る。Frog and Toad シリーズは、小学校教科書にも採用されており、挿絵と易しい文章の中についつい引き込まれてしまう作品である。Curious George シリーズは 2014 年 11 月現在 NHK 教育テレビでも放映されており、映像と併せ

で楽しめる。Mr. Putter and Tabby シリーズは、老人と動物保護施設で出会った猫のタビーとのほのぼのとした日常を描いている。やさしい本の中にもこころを癒してくれる多読本は多く、多読に疲れた時、また日々の生活で蓄積したストレスを開放する際にも、これらの本が重要な役割を担っている。

もう少しレベルが高く 2000 語から 5000 語の本では、次のシリーズが注目されていた。

- Cam Jansen シリーズ
- Mercy Watson シリーズ
- Disney Read Along シリーズ
- Magic Tree House シリーズ
- Marvin Redpost シリーズ
- Rainbow Magic シリーズ

Puffin から出版されている Cam Jansen シリーズには、同社から入門編として Young Cam Jansen シリーズが同じく出版されており、入門編から本編へと読み進める学習者がよく見かけられた。ここには含めていない初心者向け「なま英語」の入門書として Nate the Grate シリーズがあるが、これは好き嫌いが明確に分かれる書籍の一つである。学習者いずれもが、これまで学習してきた英語と異なる印象をもつが、それが新鮮であったという感想を持つ学生もおれば、それとは対照的に「圧倒的に読みにくい」ということで敬遠してしまう学生もいる。否定的な印象を持った後者の学生には、一時 Nate シリーズから離れて、読む力が向上したと感じた時に再び読むことを薦めている。

後期になり読むことにも多くの学生が慣れて来るそのときを見計らって、オーディオブックを活用した「聞き読み」に挑戦するよう授業内で呼びかけを積極的に行うようにしている。まだ、「聞き読み」をうまく自分の多読プログラムに組み込める学生はごく一部に限られているが、今後彼らが多読を継続していけば、1万語以上の本ではうまく「聞き読み」を取り入れつつ、次第に長めの書籍にも手を伸ばしていけるようになると思う。

## 8. 初級レベル（多読開始時のレベル：英検 3 級が合格する程度、または TOEIC300 点程度）（良知恵美子）

初級レベルの学生は、英語の基礎学力が十分定着していない。中学及び高校時代を通じて英語に苦手意識を持ち続けており、残念ながらあまり達成感を感じたことのない者が多い。そんな彼らにとって多読は救世主になりうる学習方法であると考えられる。クラス全体の進度を気にすることなく、自分のペースを維持しつつ学習を進めることが出来るからである。本年度は英語基礎科目 Communicative Writing IA,B の前半 30 分を多読に充てている。中級レベルの学生同様、

先ず FLSSC に準備されている「初心者用カート」から多読を始める。毎日規則的に多読時間を確保したり、読んだ本を多読ノートに記載していくといった多読の基本がうまく習得できない学習者も多く、このレベルの最も大きな問題点である。

「毎日こつこつ」に象徴される継続学習が苦手な学生が初心者用カートを終えるのに、6月末頃まで時間がかかる場合がある。さらに深刻な問題となるのは、カートの図書を指示通りなかなか読もうとしない学生がいることである。彼らの英語力を考慮しても十分読めるレベルの図書を揃えているはずだが、教員の指示になかなか従わない。「一日20分から始め、一週間五日は多読をするように」と、授業のたびに学生には声をかける。カートをうまく乗り切った学生はその後自分で次第にうまく選書できるようになり、自律学習としての多読に集中していく。

1年間でYL1.2までレベルを上げられれば、初級クラスは成功であると筆者は考えている。YL1.0を越える時点で一つの壁があり、Penguin Readers 1が正確に読めるようになることが1年目の最終目標である。初級クラスの大部分の学生は、読みにくくなったポイントを乗り越えるのにかなりの時間が必要である。一見すると読みの力は向上していないように思えるが、次のレベルに対応できる力を蓄え、さらなる飛躍をするためにはこの時期が大変重要である。学生の視点から考えてみると、一向に上がらないレベルに業を煮やし、読む量が激減したりあるいは授業を欠席するものまで現れることがある。教員にとっては頭の痛い問題である。読めるようになった気がしないから多読を休み、また読めなくなるという悪循環に陥る。しかし、レベルが上がるという達成感をほんの少しずつでも経験し、その成果を教員が認めさらに支援を続ける地道な指導が、初級クラスには欠かせない。少しでも気を緩めると、学生たちは一気に多読から離れていってしまうこともあり得るからだ。また、これまで初級レベルの学習者を観察していて最も強く感じるのは、「なんとなく読めた」という曖昧なレベルで読みの活動を行っていることである。これはいわゆる「すべり読み」と言われる。多読が進んでも良い成果が得られないときは、この「すべり読み」を疑ったほうが良い。学生には、常に内容理解度を9割以上に保つよう繰り返し助言している。

初級レベルの学生にとって、楽しく読めることは重要な要素である。このため、挿絵が豊富にあり既に読んでいてストーリーに馴染みのあるものを好む傾向が強い。特に人気が高く良く読まれる書籍は次の様なものである。

- Ready-to-Read シリーズ (特に SpongeBob, Henry and Mudge, Eloise)
- One Hundred English
- Welcome Books (150語以下の幼児向けノンフィクション)
- All Aboard Reading (レベル1の The Bravest Cat は特に人気)

- Penguin Kids のディズニーシリーズ
- Read Along のディズニーシリーズ
- Curious George シリーズ
- I Can Read (特に Frog and Toad シリーズ)
- Bananas (挿絵が魅力的な絵本シリーズ)
- Mr. Putter and Tubby シリーズ
- Black Cat Earlyreads (レベル1～2)

特にディズニーシリーズの人気は高い。幼い頃に本を読んでいたり映画を見ており、挿絵はもちろんであるがプロットを既に知っているため、安心感をもって読み進められるところが人気の秘密であろう。

学習者向け GR の入門としては Foundation Reading Library が評判が良い。この傾向は毎年変わらない。まさに不動の人気である。初級者レベルの学習者向け読み物は、プロットに単純なものやストーリーが急展開するものも多く、なかなか読んで楽しい類の本ではない。ただ、Foundation Reading Library でうまく学習者向けに取り組むきっかけを見出した学生は、その後 Oxford Bookworms Library Starters や Penguin Readers Easystarts へとうまく読み進んでいけるようだ。

## 9. おわりに

ごく小さなゼミから出発した本学の多読教育は、順調にその成果を生み出してきたといえるのではないか。授業内及び FLSSC、図書館を活用した授業外多読という独自のスタイルがその基盤を支えており、さらなる多読環境の充実を図るため、学内予算の獲得を積極的に行ってきたことも見逃せない。これまで多読教育を実践してきた筆者らが実感するのは、指導者自らが多読を実践しその成果を実感しなければ、学習者にその魅力を伝えることは出来ないということである。学習者と同じ目線に立ちつつ多読本の魅力を語り合い、それを将来の多読指導へとつなげていくこと、そして学習者と読後感を共有できることに喜びを感じている。今後さらに多読を継続させることで、より多くの学生の英語力を向上させ、英語の本が紡ぎだす世界観を味わいそれぞれの人生を豊かにして欲しいと指導者として切に願っている。

## 10. 註

[1]『英語多読完全ブックガイド改訂第4版』(2013)では、YL(読みやすさレベル)について、「多読を推進している SSS 英語多読研究会では、本の読みやすさを評価する共通の基準、読みやすさレベル (Yomiyasusa Level、略称 YL) という数値を決めています。実際に多読をしている人の声を集約して、『日本人

学習者にとっての本の読みやすさを YL0.0-10.0 の数値で表します。YL の数値が小さいほど読みやすいことを示します。」(p.11) と説明している。

## 11. 参考文献

- 古川明夫・神田みなみ（編著）(2013). 『英語多読完全ブックガイド改訂第4版』  
東京：コスモピア
- Kraschen, S. (2011). *Free voluntary reading*. Santa Barbara, CA: Libraries Unlimited.
- Miller, D. (2009). *The book whisperer: awakening the inner reader in every child*. San Francisco, CA: Jossey-Bass.
- Richards, J.C., & Schmidt, R. (2002). *Longman dictionary of language teaching and applied linguistics* (3rd ed). London, England: Pearson Education.
- 酒井邦秀（2002）. 『快読 100 万語！ペーパーバックへの道』東京：ちくま文庫.
- 高瀬敦子（2007）. 「大学生の効果的多読指導法」『関西大学外国語教育フォーラム』  
1-13.
- 高瀬敦子（2010）. 『英語多読・多聴指導マニュアル』東京：大修館.
- Yamashita, J. (2008). Extensive reading and development of different aspects of L2 proficiency. *System*, 36, 661-672